ライブラリー LIBRARY

国際児童文庫協会
森嶋瑤子・英国支部長に聞く

海外での日本語維持支援を

英国で30年以上、日本人を親に持つ子どものための文庫活動を続けてきた「国際児童文庫協会（ICBA）」英国支部長の森嶋瑤子さんが、文庫活動への支援を呼びかけています。来日した森嶋さんに、国際文庫が果たす役割などについて話を聞きました。

国際文庫活動への支援を呼びかける森嶋さん（撮影＝橘薫）

もりしま・ようこ　1930年、神戸市生まれ。東京女子大学卒。夫で経済学者の森嶋通夫さんの渡英に伴い、68年に英国へ。83年、ICBAの英国支部設立とともに支部長に就任。

ICBAは、海外駐在や国際結婚などにより、多文化・多言語の環境で育つ子どものための国際児童文庫活動を支援するボランティア団体です。文庫は、私設の小さな〝図書館〟のようなもの。自宅の一室や公民館などに本を置き、読み聞かせや紙芝居なども行います。

活動が始まったきっかけは、1977年に英語圏から帰国した児童のため、英国の公的国際文化交流機関「ブリティッシュ・カウンシル」の当時の副代表夫人オパール・ダンさんと日本人の母親らが東京都目黒区に創設した「だんだん文庫」。英語圏から帰国した親が、自分たちの子どもが英語を忘れないようにと、英語の本をそろえ、読み聞かせやゲームを行って、英語に親しむ環境を作ったのです。

その後、ドイツ語やフランス語の文庫もつくられました。こうした国際児童文庫を支援するため、79年にICBAが設立されたのです。

80年代初めには、英国支部が設立されました。海外の文庫では、日本語の絵本がそろえられています。読み聞かせや、折り紙、紙芝居などが行われ、日本の文化に親しむ機会を作っています。現在、日本国内の6文庫を含め世界に約60の文庫があり、英国支部は最多の36文庫を擁しています。

英国の文庫で紙芝居を楽しむ親子ら

森嶋さんが近年、強く感じているのは、日本人の国際結婚の広がり。「ロンドンなど大都市に企業人らが集中したのは昔の話。今は、国際結婚した日本人が、小さな町にも住んでいます」と話します。

しかし、企業の支援がある駐在員らの家族に比べ、「現地で国際結婚した女性やその子どもたちが日本語を維持するための支援は多くない」といいます。ICBAへの企業からの寄付も、不況で途絶えがちだそうです。

森嶋さんは「世界各地に、日本語を知り、日本を好ましく思う人が増える。日本にとってもすばらしいこと。ぜひ支援を」と、本の購入などにあてる寄付を呼びかけています。問い合わせは、ICBA東京本部（http://www.icba-1979.org）へ。

多言語共同体の場　役割大きく

丸山明栄＝ICBA代表の話

ICBAの発展はバブル経済期に重なります。多くの日本人が海外に駐在し、帰国子女が増えました。当時はまだ子ども向け英会話教室が少なく、帰国子女の中には目立ちたくないからと、学校では英語が話せることを隠そうとする子もいました。国際文庫は、学校でも家でもない、多言語のコミュニティーの場として、大切な役割を担ったのです。

私は1990～93年、アメリカに住み、帰国後に文庫活動を行い、2000年から代表を務めています。この間、日本では子ども向け英会話教室が急増し、働くお母さんも増えました。親の手間が必要な国際文庫活動を行うには、難しい時代になったと感じます。

子どもの頃に自然な形で吸収された言語は、いつまでも覚えているといいます。学校でも、会話教室でもない、文庫の果たす役割は今でも大きいと思います。

＊「図書館へGO！」休みました。